



人間が思考を巡らせる時、その脳殻の内に張り巡らされた神経細胞…ニューロンの隙間からは、極めて微弱な電波が絶えず漏れ出している。

それは一個体を見れば、宇宙の背景放射よりもかすかな、取るに足りない電氣的ノイズに過ぎない。しかし、地表を埋め尽くす数百億の人間が同時に呼吸し、怯え、願い、呪う時、その漏洩した電波は目に見えない大気のように重なり合い、干渉し合い、やがて巨大な定常波を形成していく。

かつて、人々はその波のうねりが現世の輪郭を歪めて生み出したものたちを、幽霊と呼び、妖怪と呼び、モノノ怪と呼び、あるいは神と呼んで畏怖した。

世界がまだ薄暗く、夜の闇が物理的な質量を持っていた時代、怪異は共同体の境界に、深い森の奥に、名もなき古い海の底に、確かにその座を占めていた。

やがて科学という名の強烈な照明が地表を照らし、人間がそれら「名付け得ぬもの」を忘れかけた頃、世界は新たな神経網によって覆い尽くされることになった。地球の肌を這うように敷設された光ファイバー、虚空を飛び交う無数の無線信号、あらゆる生活を調律する電子ネットワーク。

奇妙な反転が起こったのは、その時だった。

人間の脳から漏れ出す電波の定常波は、地上を覆った電子の特性と完全に同期し、その電腦空間の中に、かつてないほど強固で鮮明な肉質を獲得し始めたのだ。人工知能を持った電子のウイルスが、ネットワークの深層で数多の概念を捕食し、姿を変え、生き物のように進化していく。

生物でありながら、その構成原理は純然たるデータとプログラム、そしてネットワークそのものに属する生命体。

現代の記者はそれらを「デジタルモンスター」、あるいは「デジモン」と呼ぶ。彼らは突如として現れた最先端の産物ではない。その本質は、かつて民俗学の境界線上で囁かれていた、あの古き怪異そのものなのだ。現実の動物や植物、あるいは神仏や悪魔のモチーフをその身に纏いながら、彼らは知性を持ち、感情を震わせ、時に災害として、時に神話的な守護者として、人間のすぐ隣にある皮膚の裏側で息を潜めている。

これは、その電子の網の隙間から、取り返しのつかない古い海の色が滲み出してしまった、ある夏の記録である。